



1995.12.23 No. **BURST CITY 19**

For Revolutionary Resistance

400円

A.R.P

ARP

P.O.Box 57

Sakyo Kyoto

606, JAPAN

FAX +81/75-781-1253

蜂起

これこそがファシストの攻撃に
対する人民の回答である!!!



3月12～13日、
トルコ政府は
イスタンブールの
ガジ地区を攻撃した。
人民は蜂起し、
革命的人民解放戦線は
(DHKC)

蜂起を指導した。
4日間にわたり、
数万の人民は
街頭を埋め、
バリケードに立った。



《特集／トルコの革命的左翼デブリムジ・ソル～革命的人民解放党－戦線（DHKP-C）の闘い》
ガジ地区民衆蜂起ドキュメント／ガジ蜂起の総括と提起／指導者ドゥルスン・カラタシ釈放に関するデブ・ソル声明
反帝・反独裁の人民革命を共産主義革命に転化せよ！～DHKP-C略史／闘争に命を捧げた同志たちを追悼する～
建党一周年にあたって／トルコの地から再び世界を震撼せしめよ！／ゲリラ指導部とのインタビュー

トルコを震撼させた4日間

ガジ蜂起 ドキュメント

3月12日、トルコのイスタンブールにあるスラム街、ガジオスマンパサ（ガジ）においてファシストによるものと思われる発砲事件が起こり住民2名が死亡した。これを契機として民衆暴動が発生し、警察、治安部隊と激しい衝突を繰り返した。トルコの革命的左翼デブ・ソルは、この時に組織的な行動をとり闘った。蜂起のドキュメントと総括文が発表されているので紹介する。

【3月12日】

21:30 /イスタンブール・ガジ地区で武装した市民数人が、タクシーを奪取。

21:40 /ファシスト運転手を拘束。革命的処断を下す。咽頭部を切り裂き、数分後に死亡。

ファシスト権力の送り込んだ対ゲリラ部隊が、4件のカフェで店内にいた市民に向け発砲。12人が重傷。

22:00 /ガジ地区で民衆が街頭に繰り出し始める。ファシストによる攻撃を糾弾する叫びが上がる。「対ゲリラ部隊糾弾!」「民衆銃撃許すな!」

22:30 /街頭の壁にスローガンが描きながらいく。民衆は警察署に向け、抗議のデモ行進。

蜂起の火柱は上がった! 民衆銃撃に対する我々の回答は、石と角材による武装であった

《抵抗開始!》

22:40 /デブリムジ・ハルク・ギュチュレリ(革命的人民勢力)ならびに民主的、革命的諸組織がガジ民衆とともにイスメトパサ通りを、バリケードで封鎖。バリケードには点火され、燃え上がる火柱が道路を完全に封鎖。「人民はファシズムと闘うぞ!」のシュプレヒコールが響きわたった。

人民の怒りは大爆発

【3月13日】

0:00 /権力の武装装甲車両に対し、人民の攻撃が加えられる。ブロック、路石が装甲車に投げつけられ、車両は逃亡できずに横転。

0:15 /イスメトパサからガジ警察署へとつながる道路は民衆で埋めつくされ、警察署前に新たに火炎のバリケードが構築された。怒れる民衆の隊列は再びイスメトパサへと戻った。現場に残った別の民衆が、警察署に抗議の投石を開始。反動的商店にも次々と攻撃が加えられ、ファシスト所有の車両がことごとく破壊されていった。

我々は死を恐れはしない!

4:00 /武装装甲車が再び地区を徘徊。民衆はバリケード強化の共同作業を始める。投石が始まったがファシストはこれに銃撃で応えた。現場では10人以上が射殺された。銃声がやみ、しばらくの静寂のあと、2人の青年がバリケードの前に歩み寄って叫んだ。「名誉を



勝ち取ろう! 誇りを守り抜こう! ファシズムに屈伏し、不名誉の内に生きるよりは、闘って死ぬことを我々は選択するのだ!」3000を越す民衆が、警察署を取り囲んだ。武装装甲車の背後には、多数の警官隊が並び、民衆と対峙。

人権組織建物周辺からは、さらに数千の民衆が警察署へ向けた行進の準備を開始していた。行進の途中、ファシスト権力に手を貸す反動的商店や車両には次々と破壊攻撃が加えられていった。警察署前では、あわてふためく警官の姿がハッキリと見て取れた。

民衆が警察署へ向け進撃しようとしたその時、権力は民衆に向け銃弾を放った。頭部に銃弾を受けた女性が即死。その他多数の負傷者。少年が叫ぶ。「僕たちにも銃を!」

負傷者を病院へ搬送するため、民衆はひとまず後方へと退いたものの、緊張はなおも続いた。

英雄的闘いと、権力の虐殺攻撃

再び戦闘が始まった。さらなる怒りをあらわにした民衆の戦いは爆発する。権力はいよいよ軍を投入。兵士を警察署前に配置した。だが民衆は兵士の包囲ラインを突破し、デブリムジ・ハルク・ギュチュレリの3青年が装甲放水車の上に駆け登り、ハンマーで放水砲を叩き壊した。

7:00 /夜が明けて、戦闘中に倒れた2青年の遺体が入権組織建物に運ばれた。民衆が建物に向かおうと方向を転じた時、警察は背後から装甲車を突入させ、発砲。

戦いに死した仲間の血で、ファシストを沈めよ!

夕刻 /病院に収容されたのは、150人。死亡は20人以上と確認された。病院に収容されなかった負傷者も含めると数はさらに増えると思われる。多数の逮捕者についての状況は把握しきれていない。

街頭での火炎バリケードに、民衆は再び集まり始めた。ヌルテペ地区では、1000人以上がガジに向け、怒りの進撃を始める。デブリムジ・ハルク・ギュチュレリは権力にシュプレヒコールを叩きつける。「ファシストを絶対に打倒するぞ！」そしてE 6道路へと進撃し、民衆はこれに続いた。2時間にわたり道路を完全制圧し、交通を遮断した。ヌルテペ、オクメイダニ各地区の民衆が、ガジ戦闘に合流。

ガジの火柱はイスタンブール各地に

労働者の多く暮らすツツラ、アイディンリ地区ではガジ戦闘に連帯する街頭デモが炸裂した。ファシストの経営するガソリン給油所を襲撃、破壊した。ペンディク、ヤイラリ、カイトルの民衆も街頭に繰り出す。ファシスト組織「エセンヨル・ミリ・ゲンチュリ」には、デブリムジ・ハルク・ギュチュレリの爆破攻撃が敢行された。暴動蜂起は、全イスタンブールへと拡大していた。ガジの火柱は全イスタンブールを熱く燃え上がらせたのだ。

【3月14日】

革命勢力各派／戦線からなる委員会が組織され闘争の形態、戦術について民衆と討議。以下の要求項目が提示されている。

1. 軍、警察はガジ地区から撤収し、外出禁止令を解除すること。
2. 逮捕された仲間をただちに釈放すること。
3. 仲間の遺体を即時に返還すること。
4. 民衆のガジ地区への出入りを妨害しないこと。

戦いはイスタンブールから、地方都市へも拡大していく。

夕刻 /警察は再び民衆への襲撃をもくろむ。これには人民による、それ相応の回答が叩きつけられた。デブリムジ・ハルク・ギュチュレリは、10メートルの大横断幕を高く掲げた。「ガジ民衆虐殺糾弾！DHKPCR」これを先頭に2万人の民衆がデモに続いた。数時間にわたる戦闘的デモでシュプレヒコールが止むことはなかった。

ガジの火炎 トルコ全土を覆う！ ガジ蜂起に応え各地で連続戦闘

【3月13日】

イスタンブール・ヌルテペ地区／

2:00～1500人が街頭デモ。E 6道路を封鎖し、シュプレヒコールを叫ぶ。「我々は人民である！我々は正義である！我々は勝利する！」「人民の抵抗闘争万歳！」デブリムジ・ハルク・ギュチュレリは1500人の隊列を率いてガジへと進んだ。7:00～ガジでの虐殺の報に抗議し、市内各地の商店が店を閉める。イスタンブール各地から数千もの民衆がガジに駆けつけた。カジム・カラベリ地区ではファシスト組織のビルを襲撃、破壊。午後／ツツラ、アイディンリでは労働者が高速道路を封鎖。交通を遮断、デモンストレーション。ファシストと関係の深い

自動車工場を破壊。市内各地でバリケード戦闘が勝ち取られる。エディルネ地区ツラヤ大学ではDHKC／デブリムジ・ゲンチュリク（革命青年）の横断幕が掲げられる。イスタンブール大学、アブチラルキャンパス、イスタンブール工科大学、アンカラ中東工科大学などで、闘争支援を呼びかける学生集会。

【3月14日】

イスタンブール／DHKC－デブリムジ・ゲンチュリク率いる部隊が、ファシスト施設を襲撃、破壊。諸党派、戦線の共闘組織が大衆デモをよびかけ数千人が参加。イスタンブール市庁舎へ向け行進。

グルスユ／2000人が抗議行動。E 5道路を封鎖した。警察はデモ隊に発砲。多数が負傷した。

エセンユルト／ファシスト組織MHP（民族行動党）ビルに向け数百名のデモ隊が行進。日頃、警察を手助けする反革命宝石店に爆破攻撃。

ウムラニエ／ファシスト経営のカフェに抗議行動。

アンカラ／キジライ広場に、約1万人の労働者、学生、市民が結集。「トルコをファシズムの墓場にすぞ！」とシュプレヒコールを叫ぶ大集会が勝ち取られる。警察権力はこれに介入。装甲車で群衆に突入し、警棒で参加者を殴打し多数が逮捕された。

クスセヒール／警察本部庁舎周辺で、1000人の抗議行動。660人が逮捕、連行される。

イズミール／数万人がガジ蜂起連帯デモ。隊列はのべ1.5キロ続いた。

【3月15日】

イエニボサ／デブリムジ・ハルク・ギュチュレリの呼びかけで、E 5高速道を埋めつくす4000人の戦闘的デモ。イスタンブール工科大、アンカラ中東工科大などで全学集会。中東工科大では、集会に潜入していた国家情報部（MIT）の公安スパイを摘発、処断を加えた。ククロバ大では500人の学生集会。

【3月16日】

イズミールのエゲアン大で、ガジ蜂起連帯デモ。イスタンブール大でも連続集会とデモ。これには高校生も参加。多数の参加者に怯える警察は手出しできずに逃亡。解散地点では、ファシスト関連の諸施設が破壊された。



実践こそが勝利を生み出す最良の教師である ガジ蜂起の総括と提起

3月12～15日の3日間にわたり戦いとられたガジ暴動蜂起戦は、いかに数百ページの本を読もうとも決して学ぶことのできない事柄を我々に教えてくれた。重要なことは、これを我々自身に閉じ込めてしまうのではなく、この経験全体から結論を引き出すことである。まずもって、ガジでの反乱は社会矛盾の深刻化が突出する中で、労働者人民がすぐさま一つになり、団結しあえる準備が整っているのだということを示すものであった。彼らは知っているのだ。誰が敵であるかを。今まさに怒りに打ち震える彼らの目に映っているのは、独裁権力であり、国家であり、治安部隊であるのだ。人民は団結する準備はあるが、では戦う用意ができているのであろうか。言いかえるならば、これら大衆を正しく指導できる準備が我々内部にできているのか？ガジ蜂起は、仲間、あるいは敵に、わが戦士、勇士らの「質」を再度確認させるものとなった。

誰もこの事実を否定できはしない。しかしながら戦いが十分であったとは言えない。我々は、もっと多くの民衆を戦いの戦列に加えることができねばならなかった。原則と指導のもとに動く数千、数万の民衆が戦いには必要であったはずである。ガジ蜂起に唯一不満があるとするなら、これである。もちろん我々は人民と共に戦った。少年や母親たちも、石や火炎瓶を手にして敵と対峙した。だがバリケードの背後では、民衆を組織し、指導するにあたって若干の問題も出ていた。バリケード内でデブリムジ・ハルク・ギュチュレリ（革命的人民勢力）が戦っている時、口先ばかりで何の手伝いもしようとしない日和見主義グループが自分たちの組織の横断幕を勝手にバリケードに掲げ始めた。目の前で民衆が次々と銃弾に倒れていく緊迫した状況下で、これら日和見主義グループと討論し、あるいは排除することができなかった。もちろん、我々と共に戦い、戦闘中に仲間を失った革命的組織や党派がこのグループに含まれるものではない。

もう一度整理しておく、蜂起において以下の困難を今回経験した。

- ①ガジ地域住民、他地区住民、メディアとの連絡態勢。
- ②バリケードにおける日和見主義諸グループの情宣活動



を許してしまったこと。

③大衆扇動の道具としての、横断幕、旗、ビラの使用に慣れていなかったこと。

④革命歌などを使って、革命的精神を高揚させるべきであったこと。

この外にもまだまだ議論すべき問題は多い。これはガジ地区だけのことでなく、他の地区や現場でも同じことが言えた。我々は潜在的反体制層の自然発生的な権力への怒りを、革命性をおびた「ラディカルなもの」へと転化させ、トルコ全土を覆いつくすよう努力せねばならなかった。将来、同様の反乱がまた起きるであろうことは、予想するまでもないのであり、だからこそ今日、我々の準備の必要性が問われているのだ。我々の現在の任務は、人民大衆の中で我々の準組織を機能させ、力をつけさせておくことである。これはより生産的で、作業能力のある民衆委員会を導入する素地となりうる。こういった委員会の指導に基づく街頭闘争は、幾多の困難をも克服へと導くカギとなろう。民衆委員会の積極的機能によって、バリケード内部での障害は克服されることとなろう。こういった組織の形成を通じて、各々の任務が明確となり横断幕、火炎瓶、投石用の石や戦闘用の角材などの手配がスムーズに行なえるようになるのだ。唯一我々がなし得なければならないのは、人民の領導である。結果的に正義の戦争が遂行され、拡大するのなら、大多数の人民はこれに続くのだ。

民衆委員会はまた、人民レジスタンスに多様な形で協力することができる。例えば、戦闘での負傷者を人民の海の中で、敵のコントロールを突破しながら応急処置し、病院へ搬送することができる。パレスチナで見られた地区委員会の組織形態は良い手本である。

我々は人民の経験と、こういった民衆委員会形成の展望を確信する。戦いを経験すればするほど、共同体創出の良き例を学ぶことができるのだ。こうした民衆委員会は戦闘の現場だけでなく、つね日頃から人民とともにあり、日常生活の相談などの活動を行なえるよう対応しておかねばならない。これを成し遂げたとき、我々はわずかな戦闘から偉大な勝利を導くことができるのだ。

〔DHKP-C情報事務所〕

指導者ドゥルスン・カラタシ釈放に関する声明

昨年9月9日、トルコの革命組織デブリムジ・ソルの指導者ドゥルスン・カラタシが、イタリアからフランスに入国しようとしたところをフランス当局によって逮捕された。これに対しては、世界各地で抗議と釈放要求の闘いが取り組まれた。(本紙15号で報告)。去る1月下旬、裁判所はカラタシの仮釈放の決定を出した。これは、居住場所の指定(南フランス)と定期的な警察への報告提出という制限付のものであったが、カラタシは出獄することとなったのである。カラタシは、出獄後、直ちに地下に潜り、デブ・ソルは勝利の声明を発表した。これに対して、フランス当局は報復弾圧を加え、2月13日には、パリ一帯で一斉手入れを行ない11人のトルコ人、クルド人を逮捕し、また人民文化協会の搜索でも逮捕者が出た。パリで逮捕された内の2人については、カラタシの逃亡幫助の疑いで拘留が続いているが、カラタシは、すでにフランス国外に逃れていると思われる。

今号で紹介するのが、その勝利声明である。デブ・ソルは昨年の3月に開催した大会で組織の改編を行ない、正式名称を改めている。政治組織は『革命的人民解放党(DHKP)』、軍事組織は『革命的人民解放戦線(DHKC)』となり、通常、略称はDHKP-Cと名乗っている。本紙では、従来、正式名称である『デブリムジ・ソル(革命的左翼)』を『デブ・ソル』と略して使用して来た。呼称が一般に定着するまでは、当面、『デブ・ソル(DHKP-C)』の名称を採用する。

声明

全ての革命家、反帝国主義者、反ファシズム活動家、民主的人士、人権活動家、諸組織、個人へ

フランス帝国主義者に逮捕された我らの指導者が釈放された。

周知の通り、我が党の総書記ドゥルスン・カラタシは、1994年9月9日に、フランス〜イタリア国境を通過中に逮捕された。彼の逮捕後、フランス、ドイツ、アメリカの帝国主義者どもとトルコ独裁政府は、「テロリズム」というデマ宣伝をもって、我が組織を攻撃し始めたのであった。彼らは、思いつく限りの、心理的、生理的、思想的トリックを用いた。彼らいわく、「これは、組織の終わりだ」。帝国主義者どもは、カラタシ逮捕は「テロリズムへの大打撃」としている。極めて多数の、修正主義者、教条的マルクス・レーニン主義革命諸組織は、彼の自由を要求せず、これによって、帝国主義者を援助したのである。

我が組織は、決して、帝国主義と妥協しない。もし我々が、我が国土と人民の解放を望むのならば、我々は反帝国主義者でなければならない。この姿勢ゆえに、帝国主義者どもは、テロリズムとのデマ宣伝をもって、我々



ドゥルスン・カラタシ総書記

を攻撃したのである。

我が解放闘争において、我々は、他国の支配を直接的あるいは間接的に受けたことは、決してない。思想的かつ組織的に、我々は独立しているのである。我々は、決して、外国のイデオロギーと妥協しはしない。この非妥協の方針が、我々が闘っている戦争において、更なる力を我々に与えるのである。これが、帝国主義者どもとトルコ・ファシズムを脅えさせて来たのだ。彼らは、望みどおり、怯えるべきなのだ。今日、革命運動の内部にはあきらめと降伏が蔓延している。多くの革命組織の歴史を見るならば、妥協が甚だしく多い。これゆえに、多くの解放運動が、新植民地主義に祖国を差し出してしまうのである。革命組織が帝国主義に青信号を与え、帝国主義者に頼るのであれば、この組織は恐らくは僅かの間、権力を手にする。しかし最終的には、帝国主義が再び人民と国土を統治することとなるのだ。

帝国主義は、我が総書記の逮捕によって、トルコ・ファシズムを援助した。この逮捕の主な目的は、我が革命的反帝国主義抵抗闘争を破壊せんとするものであった。逮捕の瞬間から、我が指導者と我が組織は、帝国主義者といかなる妥協もしなかった。一個の組織たる我々にとって、総書記の逮捕は、帝国主義に対する我が解放運動を、かつてない高い次元へと導いたのである。我々は、我が人民、世界の人民、我が祖国と我が革命のために、この戦争に勝利せねばならなかった。

帝国主義者は多くの国を占領し、人民の自由を奪い、巨大多国籍企業の利益を守るために、何百万もの人々を殺している。我が組織と指導者をテロリストよばわりする権利は、彼らにはない。彼らがテロリストなのである。

フランス帝国主義は、全世界の人民に対するテロ行為という重大な犯罪歴を持っている。そして彼らは、トルコ・ファシズムを援助することによって、新たな罪を加えたのだ。フランス帝国主義が我が指導者を逮捕した時、トルコの独裁は直ちに、我が指導部への攻撃を開始した。トルコ・ファシズムは、幸福であった。我が、人民への

逮捕、拷問、虐殺が激化した。彼らは、存在もしない好機を乱用しがったのである。しかしファシズムは、我が組織が磐石であることを理解していない。困難な状況にあって我々は活動を続け、そこに良き経験が生まれるのだ。敵の攻撃、抑圧、裏切りは、我々に革命闘争をより熟知させたのである。

再度、我々は課題を学んだのである。帝国主義と独裁は、殺伐部隊の手口をもって我々を攻撃した。しかし、我がメンバー、シンパ、友人たちは、組織に固く結集して、フランス帝国主義に対抗したのである。彼らは共に言ったのだ。「フランス帝国主義は、我らの怒りを推し量ることはできない。失敗すれば、高い代償を払うこととなるだろう」。

党のための準備は続いた。我が組織に対する敵対行動を我々が如何に真剣に捉えているか、フランス帝国主義者は見て取り、彼らは高い代償を支払う意志のないことを決定したのであった。何百人もの幹部、シンパたちはあらゆる手段で帝国主義者どもの標的を攻撃するとの決意をみなぎらせているのである。例え自身の身体に火をつけることもいとわぬ覚悟なのだ。フランス帝国主義がカラタシを釈放するよう、我々は平和的行動を開始した。我々は、全世界の人民に宣言した。もし、それらの行動がカラタシの自由をもたらさなかったならば、我々は、考えつく限りのあらゆる手段を使うだろうことを。まさしく、我々がこの地平に立った時、フランス帝国主義者はトルコ・ファシストから多くの情報を受け取った後に、彼らの誤算を理解し、彼を釈放したのである。フランス帝国主義は、我々の決意に怯えることとなったの

だ。法廷で、トルコ国家からの彼の送還要請は言及されなかった。彼らは、まさしく、我が組織の怒りの包囲網から逃れたがったのである。

我々は、帝国主義に対する戦争の勝利者である。この勝利は、世界の人民、革命家、反帝国主義者、国際主義者、連帯と友愛の大切さを知る人民の勝利なのだ。

我が指導者の拘留期間中、我々は後退させられはしたが、我々は多くの国際連帯の良い手本を見たのであった。最も大切なのは、我が革命的解放戦争を止めることのできる勢力はなく、我々は決して妥協しないということを彼らに示したことであった。

我々は多くの連帯を受け取った。国際的マルクス・レーニン主義諸組織から、人権組織まで、反帝国主義の立場に立つ宗教グループから、個人に至るまでである。帝国主義の「新世界秩序」政策に対する戦いにおいて、我々は新たな人々と出会ったのである。我々は、我が総書記の釈放を、その歴史の重要なページだととらえ、受け取ったあらゆる連帯に感謝したい。我々は、この国際連帯と友愛を強めなければならない。我々は、反帝国主義、反ファシズムの戦いを世界のあらゆる所で拡大させるべきなのだ。

帝国主義打倒！

国際連帯万歳！

反帝国主義人民解放運動万歳！

DHKP-C中央委員会

反帝・反独裁の人民革命を共産主義革命に転化せよ！

デブ・ソル/DHKP-C略史

デブリムジ・ソル（革命的左翼）は、マルクス・レーニン主義を指導原則とする人民革命組織である。1970年代のトルコ反独裁闘争を闘ったTHKP-C（トルコ人民解放党／戦線）、デブリムジ・ゲンチュリク（革命的青年）、デブリムジ・ヨル（革命の道）を組織母体とし、80年代の軍事クーデターによる反動弾圧を闘い抜きながら、トルコ労働者階級を広範に獲得しつつ形成されてきた。トルコ人民革命を展望し、トルコ人、クルド人その他の諸民族を組織して、社会部門における大衆闘争を拡大させる一方、ゲリラ兵力による革命的暴力をもって人民のプロレタリア党へと発展すべく活動している。「反帝国主義・反独裁の人民革命を共産主義革命へ」のスローガンを掲げて、トルコ・ファシズム独裁政権に対する闘いを激化させている。

組織は1994年3月、DHKP-C（革命的人民解放党／戦線）の設立総会をもって、明確に「党」としての飛躍を成し遂げた。デブ・ソルの組織指導権力は、中央委員会に存しており、中央委はまた執行委員会も兼任している。中央委員会は全国から任命される。全国委は、各地方や闘争現場の代表による総会によって選出される。

現在は大衆戦線として、デブリムジ・ハルク・ギュチュレリ（革命的人民勢力）を有している。

学生左翼組織デブリムジ・ゲンチュリクに集まっていた学生らが、1970年代にデブリムジ・ヨルを結成し組織が拡大したものの、この過程で党内論争が起きる。THKP-Cの影響を色濃くする潮流と、穏健派との間で組織分裂の危機を幾度も迎えたが、最終的に「トルコ独裁権力に対する闘いには、人民の支持と武装闘争の2つの基軸が据えられねばならない」とする、THKP-Cの路線を継承した潮流が党内ヘゲモニーを獲得した。デブ・ソルは「トルコ国家によるテロ攻撃に終止符を打つことができるのは革命的暴力しかありえない」とし、「この革命的暴力は、確固としたヒエラルキー構造下の命令系統によって管理、統制されなければならない」としている。トルコ国家との戦いを明確に「戦争」とみなしていたがゆえに、こうした「暴力革命の厳格な適用」は、すべて「戦争勝利のためのもの」と位置づけている。

組織構造では、デブ・ソルの指導体制は民主集中性を採用している。闘争形態は、党武装翼としてのゲリラ部隊による武装闘争を通じた「非合法」闘争を遂行する一方、労働現場などでの労働者組織化、ストライキ、大衆デモ、ボイコット闘争、サボタージュ、学生組織や市民

組織の構築といった「合法」闘争も推進している。また人権組織などとも連携をとりながら、活動を側面的に補強している。政治囚家族会T I Y A Dや学生組織T E D K A D、女性団体D E M K A Dなどとは良好な関係性のもとに共闘している。闘争課題はトルコの国内問題に限定せず、全プロレタリアート、世界革命運動に応えるものとして位置づけられている。とりわけ湾岸戦争の際には在トルコ・アメリカ大使館や関係施設への武装攻撃を幾度も敢行した。

デブ・ソルを領導する

ドゥルスン・カラタシ党中央委員会総書記

ドゥルスン・カラタシはエラジグ出身で、貧しいクルド家庭に生まれる。1970年イスタンブール大学に入学、学生運動に加わり、デブ・ソルの前身デブリムジ・ゲンチュリクで活動を開始し、組織を拡大させた。反ファシズム闘争の中、1974年に逮捕される。釈放の後、I Y O D（イスタンブール高等教育協会）を設立、左翼組織デブリムジ・ヨルを再編し、1978年、指導部ならびに大衆戦線を統一してデブ・ソルを結成した。ファシスト軍部によるクーデター（1980年9月12日）では、逮捕、投獄され拷問を受けている。9年間の投獄中も闘争を続け、1984年には75日間にわたるハンスト闘争を闘い抜いた。

1989年、刑務所から脱獄し、再び「戦争」の最前線へと身を投じた。デブ・ソルから党へと飛躍すべく準備をかさね、党設立総会（1994年3月30日）において、正式にD H K P - C（革命的人民解放党／戦線）の結成を宣言した。カラタシは、「我々はいかなる世界に生き、いかなる国と闘っているのか」と題した文書を同総会に寄せ、今後のトルコ革命闘争、反帝国主義闘争の指針を明確にした。

92年内ゲバ抗争問題

1991～1992年にかけて、トルコ政府によるデブ・ソル大弾圧が開始される。幹部の一斉逮捕、暗殺攻撃（死者24名）などで、指導部は解体の危機に追い込まれた。組織幹部ベドリ・ヤガンらの、いわゆるヤガン・サークルは、指導部で唯一逮捕をまぬがれていたドゥルスン・カラタシを実権派とみなし、党内イニシアチブは彼を押さえることで獲得できると判断してカラタシを幽閉した。（1992年9月13日）。

カラタシは45日間にわたり身柄を拘束されたが、ヤガン派は「カラタシは病気療養中」と組織内外の仲間に説明していた。この幽閉事件の実行部隊として動いたのが、ドイツにおいてトルコ人移民を組織していた在ドイツ・デブ・ソル委員会支部であった。ヤガン派（中央委派からは「反乱一派」と呼ばれている）は、すぐさま声明文を発表し、自らが党内実権を掌握したことを宣言し、ヨーロッパ担当部局専門委員会を設立した。ヨーロッパで最大規模の活動拠点であるデブ・ソル・ドイツ委員会ベルリン支部を取り込むことに成功したヤガン派、はこれを契機として全ヨーロッパをまたにかけたカンパ・キャンペーンを展開した。事態を把握できていなかったデブ



・ソル支部メンバー、シンパは多額の資金を供出した。

事態の奇妙な進展に気づいたメンバーらが、調査委員会を設立し、真相解明に乗り出した。当初はヤガン派との交渉の場も設けられ、対話が交わされたが、カラタシ幽閉事件の事実が明るみにでてからは、互いに抗争へと発展する。93年3月3日に、「事態収拾委員会」が呼びかけられ、ヤガン派もこれに応じる約束ではあったが、委員会開催当日にデブ・ソルのドイツ・ケルン支部（中央委派）の事務所が何者かに襲撃され、いあわせた活動家10人が暴行をうけ重傷を負った（ケルン事件）。目撃証言などから、これはヤガン派によるものとされている。この日を境に、双方の暴力事件が多発し、最悪の結果となる。1993年5月1日、ヤガン派の拠点、ベルリン支部で襲撃事件があり、その混乱の中、ヤガン派メンバー、エルカン・サカールが頭部をピストルで打ち抜かれて死亡した。これを受け、抗争はドイツのみならずフランス、スイスなどのヨーロッパ支部から、トルコ本土へと拡大した。次第に事実が明らかとなるにつれて、当初ヤガン派についていた在ヨーロッパ各支部はヤガン派を離れて、主導権は中央委に戻った。

ドイツ左翼の立場と混乱

ヤガン派は敗退し、消滅したものの（ベドリ・ヤガンは南米に逃亡したと伝えられる）事態は別の展開を見せる。一連の抗争、とりわけベルリンでのエルカン・サカール射殺事件に関して、ドイツ・アウトノーマやPDS（民主社会党／ドイツ「統一」前の旧東独政権党、社会主義統一党SEDが母体／訳注）や、TKP／ML（トルコ共産党マルクス・レーニン主義派＝武装組織T I K K Oを有し、南東トルコにおいてゲリラ闘争を展開する／訳注）国際インフォ・ショップ会議（I I M／左翼系の書店などで構成する国際連絡会議／訳注）、ハンブルク反帝国主義戦争委員会などがデブ・ソル中央委派非難の見解を表明した。ベルリン・アウトノーマの討論・情報誌『インテリム』やヨーロッパ・アウトノーマ情報誌『クラッシュ』誌は「内ゲバ」終結を双方に呼びかけたものの、論調としてはヤガン派擁護の立場をとっていた。中央委派による事件調査委員会、エルカン射殺事件の真相として、「最初に発砲したのはエルカンであり、こ

の混乱の中でエルカンが死亡した」との報告を行ない、「闘争／闘争組織と闘争の規範」「裏切り一派と革命的課題」とする総括文を発表したが、インテリム誌、クラッシュ誌は中央委派の記事掲載を拒否した。デブ・ソルは現在、ヨーロッパにおいて革命的左翼部分の大衆行動の現場には参加するものの、一定の距離において活動するなど、今もしこりは残ったままである。

デブ・ソル機関誌として『ミュジャデレ（闘争）』が発行されていたが、1994年にトルコ政府の発禁処分を受けたために、現在は『イエニ・クルトゥルス（新しき解放）』と名を変えて発行されている。また、機関誌として隔月発行の「革命的左翼」がある。

（DHKP-Cの文書から編集部まとめ）

闘争に命を捧げた同志たちを追悼する DHKP-C建党一周年にあたって

1972年3月30日、この日はトルコ革命闘争の歴史において大きな転換点となった。党指導者マヒール・チャヤン、そしてトルコ人民解放党／戦線（THKP-C）の戦士たちが、トルコ人民解放軍（THKO）の創設者ならびに同戦士らと共に虐殺された日が3月30日である。

1969年、1970年当時、革命や解放の名のもとに多くの民衆は一般的なブルジョア・イデオロギーを抱いていた。これは革命を誤った方向へとねじ曲げるものであり、拡大しつつあった破壊と抑圧支配に対する反体制意識の潜在性をブルジョア党へと汲み取ってしまうものであった。幾世紀にもわたりあらゆる弾圧下にさらされ、何度となくこれに抵抗し、敗れてもなお決して屈服することのなかったアナトリア人民の若き勇士たちは、全世界を革命の波が襲った時、体制の補完物となりさがっていた、いわゆる「左翼」を批判せずにはおれなかった。

アナトリア人民は、世界の人民と同様、抑圧なき生活、

搾取なき生活を送る権利がある。

トルコ人民解放党／戦線（THKP-C）ならびにトルコ人民解放軍（THKO）は、権力に抑圧されしアナトリア人民の抵抗闘争を、武装闘争をもって革命的に転化させることを決定した。人民の力に信を置いていなかった改良主義勢力は、これを塵芥と煙幕をもって覆い隠した。THKP-CとTHKOは武装闘争とアナトリアにおける革命状況を領導した。そして革命を妨害せんとした勢力に対しても戦い挑んだ。決して多くはない武器、戦士、そして外国からの支援も受けない中で戦った。最も重要だったのは、これが我が革命闘争史において自らの行為を自覚し、革命にすべてを捧げるのできる者の手に解放闘争はあるのであり、そこに未来が委ねられているのだと認識する最初の瞬間であったということだ。強力な戦争、困難な革命とは大きな代償を支払わねばならないものである。とりわけまず闘いの指導者が、その生命を引き換えにするのであり、まさに革命闘争の歴史は血によって書き記されるのである。

トルコ革命運動史上、最初に登場することとなったこれら革命的社会主義者を抹殺するために、ファシスト政府やいわゆる「左翼」に至るまでが全面的に動員された。革命勢力は包囲された。だが同志らの死の報を通じて、革命思想が人民へと到達したのは明らかであった。

これらアナトリアの勇者たちは、我が歴史的英雄、セイク・ベドレティン、トルラック・ケマル、セイート・リザ、ピル・スルタンのごとくに命を投げうった。支配階級が抹殺せんとしていたこの革命運動を、アナトリア人民は反乱を熱望しつつ再び歴史の舞台に呼び戻したのだ。THKP-C、THKOの指導者は、不可能と言われたことを実行したのだ。「不落」とされた専制国家機関に対し、戦争を開始したのだ。こうして彼らは人民の思考と心に深く浸透し、自由への道程を示した。蜂起はすでに始まっていた。自由への希望が現出した。革命への道程は明確となった。今日、トルコならびにクルディスタンの数千、数万もの人民が武装闘争を支え、自由は人民戦争によって勝ちとられるのだと我々は信じている。

デブリムジ・ソル（革命的左翼）と革命闘争

革命は十分に組織された指導性なしには完遂されない。マヒール・チャヤンとその同志が生命を落とした時、闘



ガジ蜂起／鎮圧部隊との対峙

争を継続、遂行すべく、我々は組織化を行なった。大衆を領導しうる革命党は、書斎でできあがるものではない。小さなグループから組織を、そして組織から党を創出するのは（権力と）戦うことなしには、そしてその中で自らを証明していくことなしには不可能なのである。THKPCが（政府によって）構造的に破壊された後、我々はデブリムジ・ソル運動をいくつかの闘いを経験する中で建設して行った。我々はこの過程で数百もの同志たちを失った。闘いに殉じた同志たちはデブ・ソルの礎石となり、革命の土台となった。デブ・ソルが建設されて、地方から都市にかけて全国的な人民の支援を受け戦う戦士たちの運動となった。そして人民の圧倒的共感、関心と呼び、敵権力の心の内に多大な脅威を与えた。

同志たちは生命を落としながら勝利し、あるいは敗北しながら、闘争をいかに領導し戦うのかを学んだ。勝利へと前進する過程で、何度となく多大な損害を被ることとなった。だが、誤りを正し、敵に屈することなく我々は常に復活してきたのだ。THKPCの遺産を受け継ぎ、我々こそがこれを代表する者であるのだと、敵やそれに類する者どもに認識させた。右翼、左翼双方からの我々への敵対に打ち勝つには、十分な力を我々は有していた。THKPCの実践をなし得、防衛し得るのは、唯一我々のみであったからである。当時、党組織でさえなかったデブ・ソルが、敵にとっては悪夢であった。デブ・ソルは、より強固になっていく過程で一度は押し潰されかけはしたが、党へと飛翔し、戦争を継続している。これに対し権力は我々を抹殺すべく、攻撃、殺戮、挑発、中傷をもって我々を包囲した。幾度となくとり囲まれ、敵対攻撃にさらされた。指導層も含め、多くの同志たちを失った。かつて一度たりとも降伏したことはなく、勝利を確信し続けるアナトリア抵抗闘争の伝統に我々は続いた。我が革命への道程において乗り越えねばならない障害はあまたあった。

敵勢力は「我々は奴らを粉碎した」「奴らを一掃した」「もはや再び立ち上がるなどではしない」などと喧伝した。だが革命を約束した我々は、一段と強固に我が人民に呼びかけた。いかに高くついても、我々は我々の言葉を守りぬく。

革命的人民解放党—戦線（DHKPC） こそ革命の指導者

1994年の設立総会においてデブ・ソルは、歴史的発展、組織的位置、国家形態、現状などについての討論、分析を重ね、前衛的指導層をもって、党を建設することを決定した。我々は人民に、党／戦線を宣する総会で行なった新組織体制を準備せねばならなかった。この期間、我が指導的同志たちの一部が逮捕された。その中には虐殺された者もいる。そして同時期、我が指導者同志が帝国主義の手により、5カ月にわたって拘束された。（フランス当局による、デブ・ソル指導者ドゥルスン・カラタシの逮捕弾圧／訳注）これら不当な諸事件にもかかわらず、党／戦線は、その政策と行動を通じ大衆を強力に魅きつける領域を拡大した。こうした革命的潜在性を土台

ガジ蜂起／一歩も退かずシュプレヒコールを叫ぶ



としてこそ、我が党執行部ならびに指導部は全人民へと到達できるのだ。

DHKPCはアナトリアの大地で成長している

DHKPCの結成は、特定民族、宗教のどちらをも土台としてはいない。DHKPCは、我が大地に暮らすクルド人、トルコ人、アラブ人、シルカシア人、ラズ人、グルジア人、アレウィー派、スンニ派、シーア派、すべての党であり戦線である。彼らがいかなる民族であり、宗教を有しようとも問題ではない。民族をまとめあげ、ゆえに民族の立場を弱くしている「ナショナリズム」を、DHKPCが革命への力へと転化するのだ。

現在アナトリアが全人民の監獄となっている事実を、DHKPCは認識している。この獄壁を破壊し、人民を解放へと導くには、革命戦線を統一し、トルコ・ファシスト勢力を打倒し、人民革命権力を打ち立てることが絶対的に必要なのである。

隔離され、分散され、毎回敗北してきたクルド・トルコの蜂起から生じている結果を覆していくことが必要であると我々は信じる。人民の共通意識も同様である。これまでのあらゆる抵抗闘争は支配階級の結束によって非難され、支配されてきた。統一した人民権力、ファシスト勢力の打倒を直接的に目指す意志をもって、すべてが共に戦い、人民を統一する組織を創出するのだ。アナトリアは中東、バルカン、近アジア一帯における革命の根拠地となる。全人民が自由のうちに、共に暮らし、大地の富を分かち合いながら、帝国主義ならびに内なる諸勢力に対峙して行く根拠地となろう。

帝国主義支配、独占資本への協力者、土地領主、人民

の富を奪う強奪人どもにはDHKP-Cの手によって最後のトドメが刺されるであろう。

この戦争は全人民のものである

自由な国で搾取なく生きるための戦いの過程で、一層の殉死者が出る事となるかもしれない。しかしながら若き青年のみが自らの命を捧げ、自由の道を主張する時代は終わった。この戦争は、年齢に関係はない。我々のすべてに関わっているものであるのだ。数百、数千、数万もの人民が戦っている。真実を悟り大衆を領導せんとするのは、もはや一握りの若者たちだけではない。今や問題は、組織し、武装し、敵を打ち倒すことにあるのだ。

我々はあらゆる手段を使って戦いを遂行する。地方そして都市を貫く銃声は、各都市での蜂起に応え、人民戦

争へと引き継がれる。経済・政治ストライキ、大衆的デモンストレーション、街頭行進、抗議行動、サボタージュ、暗殺、敵施設の破壊、敵の放逐、諸戦闘、武装-非武装、合法-非合法を貫く戦い。この3月のDHKCによるガジでの蜂起は、わが党の思想の正しさと先見性を証明するものであった。将来、地方や都市部において、様々な抵抗闘争が爆発するであろう。これが勝利的な成果をおさめ、全国に拡大すれば、武装闘争をもって権力を奪取することは決して困難なことではない。組織された人民の権力による革命的指導性はいかなる権力も、いかなる武器をもってしても打ち倒すことはできないのだ。

DHKP-C中央委員会

トルコの地から再び世界を震撼せしめよ！

DHKPならびに、その武装翼たるDHKCは、「抵抗宣言」(1971年)において革命の道程を明確に照らし出したTHKP-Cを基体として再編された。抵抗闘争、英雄主義、自己犠牲の精神のもとに闘いに殉じた数百もの戦士たちの血の結晶たるTHKPを受け継ぐDHKPの歴史は、まさにデブリムジ・ソルの歴史そのものである。デブ・ソルは、革命的実践、名誉、栄光のもとにTHKP-Cの遺産を継承している。この歴史は、帝国主義者、あるいはこれに加担する者にとっては、現実の悪夢となる人民運動となった。今日、獲得した大いなる力、デブ・ソルという力をもって、我々は自身の歴史を描き、党と戦線という武器を手に、国家権力の奪取へ向けた新たな闘いの局面を迎えている。

ゲリラ戦争

ゲリラ戦争を闘い抜いているのは、人民である。我々の目的は、ゲリラ軍、人民の先駆的勢力を建設することであり、また人民そのものをゲリラ軍へと移行させることである。各都市やクルディスタン、黒海、地中海、エーゲ地方の山々-全土が、わが党の戦場なのだ。わが党こそが全土を縦断するゲリラ攻撃をなしうる唯一の勢力である。DHKC活動家の闘いは、まさに伝説的である。それは常に人民を味方につけ、そして大いなる危険をも



ガジ蜂起／負傷者を救援する

顧みず、「全く不可能」とされた敵-攻撃目標に、勇猛果敢に挑む闘いであった。わがゲリラ勢力は、警察署、ゲリラ壊滅作戦を指揮する将官、首相や閣僚、警察署長、CIAエージェントを必ずや攻撃するであろう。これらすべての輩どもには、人民の正義の鉄槌が打ち振り降ろされねばならない。たとえ国家治安部隊に包囲されようとも、我々は最後の銃弾が尽きるまで、旗を高々と掲げ、社会主義のスローガンを声高く響かせ、強固に闘い抜く。壁には我らの血で組織の名を刻もう。全世界の革命的解放闘争の名誉と革命遺産を守り抜くのだ。

義勇軍

人民の財産、そして生活そのものを含め、あらゆる一切を脅かすファシストのテロに対する正義を、わが人民は要求している。この正義とは、尊厳を防衛するものである。わが武装せる義勇軍は、人民の要求に応える地方組織である。義勇軍は、わがゲリラ兵によって組織される都市のプロレタリアート青年、労働者や地方の農民から構成される。短いその歴史にもかかわらず、わが義勇軍は今日、ファシズムに対し圧倒的攻勢をかけている。義勇軍はゲリラ戦争を支え、戦闘力を高め、我々を支える重要な勢力となっている。人民の正義の刃をノド元に突き付けられた抑圧者、搾取者、人民の敵どもは、恐怖に怯える日々を送っている。

出版・情宣

我々は、討論したことは常に実行に移し、また実行したことは討論してきた。これまで数多の討論を重ねてくるなかで、実践できなかった事柄もある。しかしまた、それ以上の実践を行ってきたし、情宣活動も防衛してきた。この革命的実践の伝統は、わが革命的情宣活動の原理の導べとなっている。合法の党機関紙のほかに、非合法の党-戦線の出版物も発行され、大衆に日常的闘争、武装作戦の声明などを紹介している。加えて、合法下の出版活動においては、貧困地区における青年や労働者に

向けて発信される新聞、雑誌などがある。アナトリアなど約20の地区の新聞／機関紙のほかに、党の声を幅広く伝えるために英語、アラビア語、ドイツ語、ギリシャ語などでも出版物を発行している。党の革命的出版物は、人民解放闘争の声でありつづけ、戦闘性を秘めた革命的真相を解き、また防衛し、ファシズム排撃を掲げ、人民の要求を訴えるものであるのだ。

労働者

わが党とわが戦線を建設した手、そして革命を勝利へと導く手とは、生産者の手である。労働者階級のその手によって、党は「革命的労働者運動」となった。16年にわたるこの革命的労働者運動の闘いは、ストライキ、大衆行動の最前線にあり、革命的暴力をもって人民の敵を処断してきた。運動は、広範な支持のもと真の大衆組織となった。今日、革命的労働者運動は職場労働委員会、ストライキ支援委員会、様々な労組や協議会、ならびに職場で闘う労働者によって組織されている。また労働者への指針を示す出版活動も行なっている。これらの諸戦線が、労働者階級を各都市において緊密なる大衆勢力へと、共に導いていくのである。そしてこれらによって、武装せる戦いや抵抗闘争が牽引されるのである。

クルディスタン

党の戦士ならびに指導層には、様々な民族から各階層の人民が結集している。トルコ人、クルド人、ラス人、シルカシア人、グルジア人、アラビア人が、わが党を構成する。党は、わが大地に暮らす全ての民族の労働者階級を代表し、その共同体の解放へ向け闘っている。全トルコ、全クルディスタンが、わが革命戦争の戦場である。クルディスタンでは、わがゲリラ部隊と大衆戦線が、人民を桎梏に置く帝国主義、そして国内においてこれと密接に手を結ぶファシスト国家のロボットどもを、完全に打倒、消滅させる戦争遂行の任務に就いている。帝国主義によって汚されぬ、偏狭な民族主義によって限定されたものではない「民族アイデンティティー」を、我々は防衛してきた。アナトリアは、まさに民族のモザイク絵である。社会解放を待ち望み、帝国主義とあらゆる隷属状態に対して闘う全ての民族アイデンティティーから、我々は構成されている。今日、虐殺による民族抹殺攻撃に直面しながらも、自由のうちに生きる権利を訴えるクルド人民による民族アイデンティティー獲得へと向けた闘いは、わが革命闘争によって前進している。

公共労働者

公共部門で働く労働者は、搾取と恥辱なき国に暮らすことを、他の労働者と同様に待ち望んでいる。我々の未来、我々の尊厳とは、我々の「自由」であらねばならない。我々は全労働者の力を結集させ、共に闘うことによって自身の未来を勝ち取るのだ。現在、党は非常に困難な状況下で活動している。国家官僚については、体制の補完物であるとこれを認識している。団結する権利の一切を禁止されている数百万もの公共部門の労働者は我々の呼びかけに応え、わが党の旗の下に、そして革命的市民奉仕運動の指導の下に団結するのだ。

青年戦線

党では、青年組織として、デブリムジ・ゲンチュリク（革命的青年）が活動している。トルコにおいて、この25年間では、このデブ・ゲンチのみが唯一の戦闘的大衆青年組織であった。闘いで命を落とした数百にも及ぶ同志たち、そして投獄された数千もの同志たちは、わが人民の心の中に誇り高き記念碑となって生き続けている。現在、デブ・ゲンチは合法下での機関紙発行活動を行ない、学生自治会連盟や諸施設を有し、また各大学自治会、高等学校民主闘争委員会を組織している。これらすべての合法大衆組織は、地下非合法委員会や高等学校デブ・ゲンチ細胞などと連携しつつ共闘し、トルコの青年を領導している。わが党は、人民の未来である。そしてわが青年たちが我々の未来を築くのである。すなわち、帝国主義とファシズムに支配されるトルコの未来を切り開いていくのは青年たちであり、独立と自由、そして人民解放軍を防衛するのである。

民主的権利防衛組織と革命烈士・獄中同志の家族

民主闘争は我々の正当性、そして自身の権利を防衛する闘争である。これは時として辛酸を味わい、苦悩の過程を経験するものであった。わが党のあらゆる組織は、この闘争に加わり、我々の権利と自由を実力で獲得すべく、また革命的人民運動を領導すべく闘いの戦列へと加わっていった。トルコのいたる所で、我々の組織が活動している。弁護士、ジャーナリスト、建築家、技師、芸術家、教師の職業協会が、闘争に倒れた同志たち、獄中にある同志たちの家族と共に、正義へ向けた闘いへと加わってきている。数百、数千もの人民が、運動に内在する力を見て来たのである。そして専制支配以外のなにもでもない「法」を強制している、妥協ならざる敵と闘



ガジ蜂起／バリケードの群衆



ガジ蜂起

い抜くことを、人民は公然と宣言したのだ。

獄中闘争

トルコの監獄は、革命的獄中者に対しては、拷問攻撃を浴びせ、屈服を強いる施設として名高い。だが革命的獄中者の意志までも屈服させることは、いかなる権力もできはしない。我々の獄中闘争とは、自身の政治アイデンティティーと革命的名誉を守り抜くことであり、ファシストのテロ攻撃に立ち向かい、あらゆる手段で人民の闘争を支援し、革命的諸活動を組織することである。わが党は、世界にも類い希なるトルコの監獄システムに対する闘いの歴史を積み重ねてきた。支配階級による、あらゆる脅迫、拷問によって積み重ねられた歴史過程を通じ、わが党は数限りないハンスト闘争や、その他のあらゆる形態の抵抗闘争を組織し、闘い抜いて来た。一連の闘いは、まさに支配階級を恐怖のどん底へとたたき込むものであった。とりわけ1984年のイスタンブール刑務所でのハンスト闘争は75日間にわたって貫徹され、3人が闘いに命を捧げている。わが党の戦士、指導部、ゲリラ兵士、支援者ら数百人が現在、支配階級の獄舎につながれている。獄中にあるすべての同志たちが、社会問題への積極的な関わりや、大胆さ、勇敢さをもって我々の革命的伝統を継承し、新たな闘いへとつなげている。

農村と村落労働者

1970年代以降、わが党は大衆的抵抗闘争を通じて、地方労働者のまさに「良心」となった。これは搾取に対する闘い、そして反ファシズム闘争を創出してきた。今日、権力を奪取すべく戦いをなしえ、一層先鋭化させているのが、わがゲリラ部隊である。このステップとして我々は、綿花、ハシバミ、茶加工などの各産業労働者のために、民主的諸組織をつくってきた。この組織された大衆を統一闘争の下にゲリラ闘争とリンクさせ、無敵かつ強固なる勢力を形成してきた。わが党は、悲劇のうちに暮らすことを宣告された土地なき農業労働者や、村を爆撃で焼かれ全てを略奪されたクルド農民のために、土地、自由、解放を訴えている。アナトリアの大地、そしてそこに暮らす人民の勝利を領導するわが党の前進を阻止することのできる者などいない。

女性

現在、多くの女性の同志たちが指導部から戦士に至るまで、党内で活動している。彼女たちは大衆デモの最前線に立ち、敵の拷問攻撃に勇敢に立ち向かい、激烈な戦闘を幾度も経験してきた。敵の包囲下においても、勇猛果敢に戦い抜いた彼女たちの名は、歴史にしっかりと刻まれている。これら女性戦士たちは、彼女たちの革命的メッセージを同志たちに、そして全世界の女性に、命の限り訴えている。彼女たちの先駆的意志が、自身を闘いの最前線へと進ませたのである。我々の闘争は、すべての女性労働者、貧しい女性農民、公務員、主婦たちに、その参加を呼びかけている。

文化・芸術戦線

革命的アーティストたちも、政治組織の中で活動する一員である。人民の豊かな文化を振興し、この遺産を未来へと受け継いでいる。音楽、演劇、映画、風刺、展覧会を通じた我々の革命的芸術戦線は、強固に闘っている。投獄と拷問攻撃にもかかわらず、闘争の勝利への確信に満ちている。トルコのような国にあっては、豊かな文化をもって心のよりどころをつくり、友愛と解放を待ち望む人民に呼びかけ、組織していくことは大きな誇りである。

貧困地区と労働者居住区

革命的怒りを内在する大都市周辺部の地域も、敵を包囲する闘いの場である。数百、数千の都市労働者の目、耳、武器、意志を統合する力と組織された勢力は、いかなる敵によっても封じ込められることはない。労働者階級居住区は、人民委員会と戦闘的諸組織によって防衛されている。もちろんわが人民の安寧は、搾取者の完全なる打倒ぬきには成し遂げられるものではない。搾取支配階級は、我々の血を吸い、家々を引き裂き、パンを強奪してきた。これに対しては、搾取者の家や街頭を包囲する反撃のうねりを創り出していかねばならない。

戦線の背後で

海外の組織も、世界人民解放勢力と国際連帯ネットワークの輪を構成している。わが組織は、中東、そしてヨ

ヨーロッパにおいてトルコでの闘いの前線を支える後方支援組織を強化している。一時期には、中東におけるゲリラ・キャンプでの教育も組織してきた。党の目的は、後方からのキャンペーン闘争をもって、理論的側面だけで

なく、情宣、教育、国際主義やその他できうる限りの方法をもって前線を強化していくことである。

DHKP-C中央委員会

DHKP-C 宣言／今こそ革命の時である

トルコは現在、アメリカを頭目とする帝国主義の占領支配下にある。ゆがみきった資本主義構造に組み込まれたトルコは、まさに新たな被植民地国となっている。帝国主義と、その加担者による徹底的な搾取の下、社会発展へのあらゆる道は妨げられ、人民は抑圧、恐怖、貧困の内に暮らす運命を強要されている。

帝国主義は、独占ブルジョアジー、大地主、暴利をむさぼる商人どもと不可分の関係にある。人民による反体制勢力を抑圧し、国家権力を掌握している専制支配システムを形成しているのだ。この専制支配システムによってできあがった国家構造は、まさにファシズムを具現化したものである。ファシスト国家の軍隊、警察、あるいはこれに類する機関は、帝国主義の番犬として働き、帝国主義支配の下にトルコを占領している。資本主義構造は、内的にドラスティックな形で帝国主義搾取へ向け転化していった。社会発展をもたらす能力の欠如と、これに代わり定期的にみまわれる国家危機の波。こういった状況にあって、大衆がより悲惨を強制され、苦しみの日々を送る一方、専制支配者どもは社会をいっそうの混乱へと導いている。今日、トルコはひずみきった政治政策、モラルや世界帝国主義と、その協力者の手によって作りあげられた搾取システム経済の完全なる崩壊を経験している。人民による反体制勢力と革命闘争を圧殺すべく、支配階級は世界に悪名響かすテロと虐殺の恐怖支配を貫徹せんとしている。数十もの革命家や愛国者が、ファシスト国家の武装部隊に、日々虐殺され続けている。山々で、街々で、流血の拷問監獄で、人民に対し数限りなき犯罪攻撃が加えられている。村や森は引き裂かれ、数千もの貧しき農民たちが土地を追われ、労働キャンプ・収容所へと追い立てられた。連日のごとく国家権力は、労働組合、労働者協会、出版社やマスコミを狙い、襲撃し

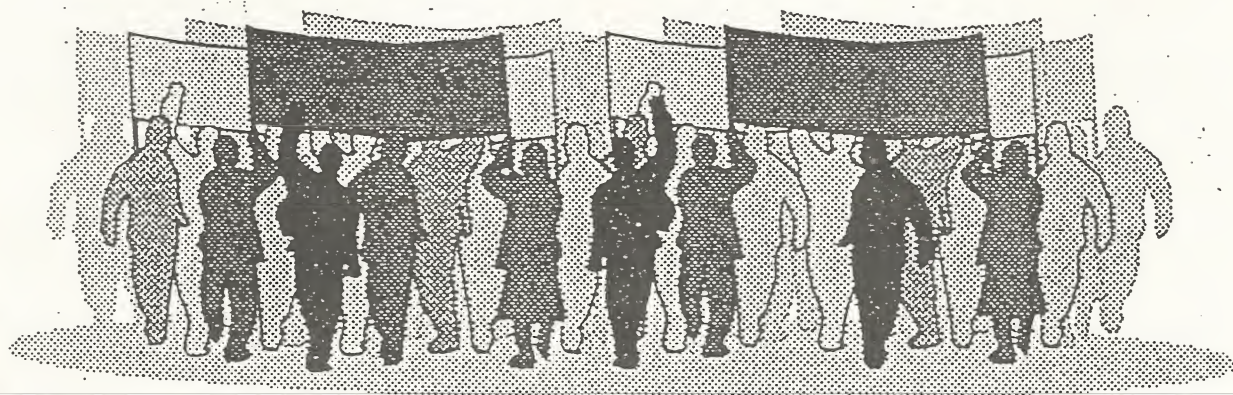
ガジ蜂起／闘いに倒れた仲間を追悼する



ている。逮捕された者には当然のごとく拷問が加えられている。国家権力が憎悪たぎらせる数千もの革命家や愛国者たちには、日常的拷問攻撃が浴びせられている。人民大衆は、この蛮行の阻止と、解放と希望への新たな道程を模索することを今、待ち望んでいるのだ。

希望の名のもとに

DHKP-C (革命的人民解放党-戦線)



武装し、革命を現出させよ！

デブ・ソル指導部とのインタビュー

デブ・ソルのゲリラ部隊の旗

本インタビューはデブリムジ・ソル指導部アスラン・タイフン・エズギュクが昨年、トルコ一般紙との会見に応えたものである。トルコにおける左翼運動の状況、クルド解放闘争問題、軍事政権下での革命的左翼の闘争などについて、重要な文献資料となると思われるので、ここに訳出して掲載する。

アスラン・タイフン・エズギュクは1955年生まれ、イスタンブールの出身。学生時代にオリンピック・ボート競技のメダリストとして「国民的英雄」となるが、共産主義に目覚めて学生運動に身を投じて革命運動に加わり、デブ・ソルのゲリラに志願した。後に逮捕され、5名の同志とともに「死刑判決」が下された。当局は脱獄防止策として、6名の死刑確定囚をアナトリア各地の刑務所を巡回移送拘留した。エズギュクは数年間の獄中闘争を闘い抜き、とりわけ1984年には獄中ハンスト決起し、75日にわたるハンスト闘争を貫徹している。

1990年7月、監獄からの脱獄に成功し、戦線に復帰。現在はDHKP指導部メンバー。

【Q】トルコ左翼勢力は、軍事政権が登場した時に対応する準備ができていたのでしょうか。今日、当時を振り返ってみて何をすべきであったのでしょうか。

【A】9月12日クーデターへの準備をすることは、我々にとって戦争を準備するということであった。トルコ左翼勢力は真っ向から戦う気などさらさらなかった。ゆえに戦いへの「準備」などまったく不可能であったと言える。左翼のイデオロギー、政治的地平、心理状態のどれを見ても「準備」などからは縁遠いものであった。9・12クーデターの前兆が感じとられた時、左翼がとった対応は、まず「退却戦術」の名のもとに、いかにトルコから逃亡し、戦線を放棄するか「理論」を作り上げようとしたことであった。我々の運動は、まだ新しいものであったが、いかなる手段をもってしても、来たる戦いの時に備え、またその戦いを激化させていく準備をすべく活動していた。この結果、別の討論が生みだされることとなった。これは絶対的に必要な討論であった。この準備の過程は、我々が革命的道程を切り開くことから始まった。こういった準備は、イデオロギー的統一性、自由、中央集権制を備えた組織以外にはなしえないものであった。この展望の下、我々は1978年デブリムジ・ヨル（革命の道）を結成した。我々はまだ若く、経験にも乏しい素人集団ではあったが、たちまちにして戦いを激化させ、戦いの中で学びつつ組織作りを開始した。我々は都市部ならびに各地方において加速的に闘争を展開させた。また地方におけるゲリラ闘争の発展から経験を獲得していった。ギュン・サザクへの処断攻撃戦闘は、民間ファシストに対する最終掃討戦のひとつとして上げられ



よう。政治的状況からの民間ファシストの敗退、それに続く真性ファシストとして現出したテロ攻撃の登場を受け、我々はこの真性ファシストとの対決へと、戦いの軸をシフトさせた。我々はテロリストどもを処断した。いくつかの警察署を急襲した。新たな軍事クーデターを策謀している輩に対しては、ニハット・エリムへの処断攻撃戦闘をもって我々の激しいメッセージを叩きつけたのだ。

力量的には不十分ではあったものの、この時期、我々の地方ゲリラたちが、都市部の活動に合流してきた。デルシム・ペルテック区では憲兵隊舎を攻撃し、抵抗する兵士1名を処断している。

我々は武装闘争のみに依っていたのではなく、あらゆる形態の闘争の現場に常に在った。大衆行動を組織し、これに数千の人民、ストライキ、土地占拠の闘いが合流してきた。生活物価高騰への抗議行動の呼びかけには、中小商店主らの支持も受けつつ、大衆行動を組織して、イスタンブールにおける（人民の）「生活」を実力的に奪還した。

これらの戦いを横目に、左翼勢力は、（権力側からの）「挑発」についての議論を繰り返すばかりであった。ゆえに彼らは非戦論者にとどまったばかりか、あらゆる手段をもって新生デブ・ソルの闘いを妨害せんとしていた。言い換えれば、彼ら左翼勢力は、9・12クーデター状況の現出に何ら対処してはいなかったどころか、これに対する準備を行なう勢力を妨害したのである。

我々の闘争の激化と大衆組織活動は、ファシストによる弾圧に抗し、人民をより強固に団結できるよう準備すべく指導したのだ。我々の諸活動は、圧倒的支援、シンパシーを人民内部に創出せしめた。例をあげるならば、デレの憲兵隊舎への攻撃戦闘は、今日振り返ってみるとまさしくシンプルなものであったかもしれないが、人民ならびに独裁権力側には、大きな意味をもたらす闘いであった。この戦闘はデルシムの反乱（1938年）以来、初

めてクルド人民の名において遂行された闘いであったからだ。

9・12クーデターが現実のものとなった時点で、我々は深刻なジレンマと力量不足を感じ、これを深く認識してきた。我々は広範な危機にさらされることとなった。地下層における文化認識が十分ではなかった。闘争の継続を可能にする十分な支えが、最前線にもたらされるまでには至っていなかった。ゆえに前線が必要に応じて退却し、再び武装し、闘争を準備させることが可能とならなかった。しかしながら闘争に対し、優柔不断な対応が許される余裕はなかった。これが（権力との）「戦争」の背景にあった状況である。このだれもが逃亡する時にあって、若き革命的左翼勢力たるデブ・ソルは、まさに戦場に自身を置いたのだ。

軍事クーデターに対する戦いを開始してから、わずか1カ月のうちに、我が中央委メンバーと組織幹部、指導層が逮捕された。だが我々はひるまず闘争を継続し、闘争の再構築を宣言した。我々が外的影響力をもがれてしまった状態にあって、逆に内的な現場における位置を獲得することには勝利した。我々の同志3人が、獄中でのハnst闘争の過程で闘いに命を捧げることとなった。

「なにをなすべきか」が繰り返し問われた。我々は言う。まさに戦うことに展望があり、解決があるのだと。闘争を一層激化させる中で、我々は準備を固めていくべきであった。より早い段階で闘争を開始し、より確固とした決意を示しておかねばならなかった。ファシズムとその登場に打ち勝ち、そして勝利するには、闘争しかないのだ。軍事政権は、トルコを蹂躪しているのだ。逃亡し、屈服した者たちは、決して降伏すべきではなかったし、少なくともトルコから逃亡してはいけなかったと我々は考える。

【Q】トルコ左翼は、この9・12クーデターでの敗北を十分に総括しきっているのでしょうか。

【A】トルコ左翼は、9・12クーデターを総括してはいない。総括などからはほど遠く、むしろ9・12状況の結果、イデオロギー的には屈服してしまった。

この点から見ると、唯一PKK（クルディスタン労働者党）が、他と異なっている。その実践からも明らかのように、PKKは自己批判作業をしっかりと行なっている。だが、PKKは自己の誤りを受け入れてはいない。誤りの理論的、政治的分析はせず、この作業を大衆に公開してもいない。これは現在の諸問題の要因でもある。PKKは組織の国外への脱出を「成功裏の戦術的撤退」とした。これによってプライドは守られはしたものの、決して有益なことではなかった。長年にわたる闘いの中で、我々は9・12クーデターを総括している。1983年の総括会議、1986年の戦術的退歩、ならびに1989年の戦闘的総決起闘争において、総括作業がなされている。今日、9・12問題については、我々内部で十分な総括作業がなされたと認識する。当時よりも一層激化した（権力による）抑圧とテロ攻撃状況下で、我々が創出してきた今日の闘争の総括に関しては、我々の未来を切り開くべく、

日々努力して行なっている。現在のトルコにおける抑圧とテロ攻撃は、9・12状況とは比較にならないものだ。事態は悪化しているのだ。PKKは別にして、我々は未だ戦地において孤立している。左翼勢力の中には、組織内に武装翼を設置しようと試みている部分も存在する。だがこれらの試みは十分な確信に基づいたものでないばかりか、脆弱である。これら左翼勢力には、正しい戦略と十分な経験がない。銃をオモチャの道具のごとく扱うべきではない。武装闘争を高邁な意志決定によって、武器をとって戦いの中で学びとって行くとしても、決して銃をオモチャにしてはならない。ひるまず、左右に振れることなく進み、正しいと確信することを守り抜き、実行していくことは、イデオロギー的な力があるこそ可能となるのだ。我々がイデオロギー的に獲得しえた力あふれる道程だからこそ、続くことができるのだ。過去から現在に至るまで、我々はこの考えを変えてはいない。我々が過去に口にし、実行したことの立場性は守り抜いている。我々のなしえたことは闘争によって支えられている。唯一以前と異なっている点は、今日、我々内部には以前にも増して自信が培われているということだ。

今、我々はかつて以上にイデオロギーと路線、そして我々自身に、さらなる自信を深めている。つまりは、我々はより大きな力を手に入れた訳である。我々は希望を抱いて、未来を見据えている。仲間がこのプロセスに学んでくれることを期待する。これこそ我々の願いだ。

【Q】1987年以降、トルコ左翼と在野勢力が拡大を見せました。数千もの労働者、公務員、学生がデモに参加しています。この過程で、トルコ左翼勢力は強固になり、大衆に広く認知されるようになりました。しかし1991年を境に、歴史的な「左翼の衰退状況」（すなわち東欧、ソ連の『崩壊』／訳注）を目のあたりにしてきました。この衰退状況にあって、トルコ左翼勢力も同様に力を失ってしまったようです。一体どういった事態が進行したのでしょうか。民衆の熱望していた状況が到来しなかったのでしょうか。革命は誤りだったのでしょうか。あるいはこれは大衆闘争の中でよく見うけられる上昇・下降のベクトルの古典的事例なののでしょうか。この「期間」の問題については十分な位置づけ作業がなされるのでし



山岳地帯でのゲリラ部隊



ようか。

【A】その質問には非常に悲観的のトーンがあるようだ。悲観主義は誤った総括から生まれる。これは知識階層がいかに偏狭な視点しか有していないかとの証左である。そしてこれは大衆行動のわずかな上昇と下降にとらわれて、政治的な諸発展と、その局面を見失った時に見受けられるものである。

1986年の大衆闘争と、それに続く闘いが自然発生的なものであったことは明らかである。トルコにおいて、政治的發展に影響を及ぼす闘いに、高揚そしてまた衰退はあるにはあったが、これは決して誇張された表現で語られてはならない。国家に対決しうる前衛組織の革命的武装闘争によって導かれる発展をもたらす大衆行動が重要であるのだ。これは意味深い事柄である。武装闘争によって触発され、闘いの戦列に加わってくる大衆と、経済的、民主的変革を要求する大衆は、2つの全く異なったものである。

武装闘争が権力奪取を目指す意識運動の領域へと到達する中で、ブルジョアの反体制勢力の域を出ない経済的民主変革要求運動に限定された自然発生的大衆運動は、結果的には段階的に減退していくのだ。こういった地平に闘争の基軸を据えようとする諸組織は、自ずとその正体をさらすものである。そしてこれらの組織が自ら後退局面を迎えるのは避けられないのである。武装闘争の創出する大衆的潜在性は、即時的には現象となって現れ出ないが、一定の時を経て爆発的に現出するものだというのは事実である。この事実、世界そしてトルコで幾度も証明されているにもかかわらず、武装闘争をナロードニキ主義と見なし、悲観的にしか言葉を交わさず、まして武装闘争を非難、攻撃する勢力は即時的な現象が現出しえないことを以て、その根拠としているのだ。彼らが繰り返し口にするのは「武装闘争が始まり、大衆闘争は後退した。武装闘争路線が誤りであったからだ」である。そこには、革命運動に反対する彼らの議論があるばかりである。トルコ人民解放党／戦線（THKP-C）が3月12日をもって武装闘争の狼煙を上げた時、武装闘争に反対する勢力は我々のこの路線を激しく非難した。だがTHKP-Cの武装闘争によって創出された未曾有の大衆的潜在性の高揚は、トルコにおける階級闘争の新たな

ページを開いたのである。潜在性があらゆる武装闘争を刺激した事実を否定することはできない。また、これこそがトルコ左翼の、まさにその存在理由であると言い得るのである。9・12以前の我々の運動にも、まさしく同様のことが起こっていた。激化せる武装闘争が、若き革命的左翼運動に発展、強化されゆく過程で、革命闘争はトルコの地に深く根を下ろした。これを取り除くことなど、もはやできなくなっていた。武装闘争の発展段階において、現状に追従する勢力の活動は後退し、逃亡する以外の路線を持ちえなくなっていた。これらの諸要因をもって、今日の状況が総括されねばならない。1989年以後、我々は武装闘争を追求することで、現国家に代わる別の選択肢をもたらす段階へと到達した。この発展には一時的な後退局面があったものの、自然発生的な大衆行動は、経済的、政治的危機が深刻化する状況下、同時に質的向上をもった大衆行動を引き出した。このプロセスは、さらなる闘争の激化をもって推し進められるものである。

この観点で総括するならば、1986年以降の運動拡大は左翼をより強固な運動主体へと導いたのだ。1991年を境に運動が後退したと言うのは、当たっていない。

1986年以後の闘争の拡大は、9・12状況の続いた長い年月の沈黙を打ち破る大衆の運動であった。だがこれは政治組織とは距離をおいた経済的諸要求運動以上のなものでもなく、脆弱な運動にとどまった。革命闘争によってもたらされたものではなかったゆえに、独裁支配の続く政治状況を追い込む条件が整ってはいなかったのだ。

左翼がこの段階で反政府勢力の主導権を獲得して、その運動の中心となったことは誤った結果をもたらした。これは内側から見ていたのでは理解できないものである。この当時、左翼は立ち上がろうとさえしていなかったのだ。我々は1985年、退却することを決め、これを実行に移そうとしていた。民衆が立ち上がるべく要請していたその時期に、我々は退却しようとしていたのだ。もちろんこれをもって、我々が大衆運動に感覚的に鈍くなっていったととらえてはならない。経済的、民主的要求に基づく運動に我々が参加しようとしていた時期、我々は武装闘争路線を棄てず、武装を通じて影響をもたらそうとしていた。大衆活動に触発されて、安易、即座に出版物を発刊したりする組織は大衆に無視されていた。一方、当時我々は退却戦術をとっていたにもかかわらず、大衆は部分的にはあるが、我々に加わってきた。我々が実践のうちに、彼らを領導しようとしていたからである。1989年、我々は成功裏にこの大衆の発展を、ラディカルな地平へと移行させた。人民大衆と我々の結束は、より強固なものとなった。質的強化に基づく我々の闘争の理論的拡大は、1990年以降に開始されたものである。1990年、我々は退却戦術に終止符を打ち、武装闘争、政治路線戦術、大衆活動にわたる闘争のすべての領域で躍進を勝ち取った。我々のスローガン、「我々は正義である！我々は勝利する！」は、大衆に全面的に受け入れられた。1・3ゼネスト、11・6学生行動などの大衆闘争を我々は領導している。我々はストライキ、ボイコットなどの各

大衆闘争を組織してきた。だれもが政治的に沈黙していた湾岸戦争の期間中は、武装、非武装による両闘争を広範に構え、大きな衝撃を与えた。あらゆる反帝国闘争活動家、あるいはナショナリストやイスラム原理主義勢力をさえも組織することに成功した。我々は大衆を政治化し、より強固な連帯を勝ち取るチャンスを創出したのだ。わが組織は、アナトリアのみならず各地方へと拡大していった。この闘争の発展は、とりわけ今日も引きずっている「裏切り反乱一派」による諸活動によって後退することとなってしまった。よって左翼が求心力を失った反体制勢力の中核となり、1991年以降は大衆闘争が下降の一途であるという、あなたの指摘は正しくはない。事実とは全くの正反対である。自然発生的な大衆闘争の後退と、左翼全体に人的減少が見られたのは事実である。だが我々の革命闘争では全く正反対に発展が勝ちとられ、反体制勢力として非常に非常に影響力のある中核となったのだ。1990年に開始され、独裁権力を悲痛なジレンマに追い込めようとなったわが武装闘争は、大衆に希望の光を与えた。権力側が何をなすにも、常に武装せる革命勢力の存在を意識しながらコトを進めねばならないように我々は追い込んだのだ。

目前にある段階は、いっそうラディカルな、そして政治的大衆行動へ向けて開かれたものである。実際、トルコでの革命条件は整っている。わが革命闘争は、十分な力を有し、かつてないまでに闘いを領導できうる段階にある。悲観的になる必要は、全くない。我々は希望をもって未来を見つめている。今のところ活動が誤りであったと判断されることはないし、将来もきっとそうであろう。

【Q】1987年から1992年にかけてデブ・ソルは、とりわけ大都市部における大衆動員と武装行動という点で、他の左翼との性格の違いが明確に出たのですが、これはかつて以上に運動が拡大、成長しているということだと言えるかと思います。しかし1992年以降、デブ・ソルは明らかに運動的後退局面にあります。この原因をお聞かせください。

【A】これも誤った質問であろう。実際、こういった質問をすること自体がおかしいのではないだろうか。1年前、内部に裏切り行為が生じた。今、語ったように事実



デブ・ソルの女性ゲリラ戦士

は全く違うているのだ。

質問するなら以下のような問いかけをすべきであろう。

「1992年の9・13事件（訳注①）は、なぜ起きたのか」

「いかに、そしてなぜ皆が中央指導部に反対してしまったのか」「その結果、全世界とどう闘わねばならなかったのか」「いかにしてこの局面を打開したのか」こういう質問の方が、今日。皆にとって有益な事柄とはなりえないだろうか。92年9月13日、反ゲリラ路線一派ならびに脱落派数名が、わが指導部と運動を包囲せんと企てた。独裁支配と帝国主義への日和見主義から、全てが我々の反対勢力となってしまった。中にはこの事態を喜び、騒ぎ立てたものさえいた。トルコばかりでなく、全中東、そしてヨーロッパさえもこれを注視していた。我々の「葬送の日」をだれもが待ち望む状況が生まれていた。CIAでさえ事態の成り行きを見守っていた。

反ゲリラ路線一派は、我々の全組織を押さえ込み、武器、弾薬ならびに組織の秘密を奪い去り、我々の革命的未來、組織を破壊したのだ。数十人もの我々の同志たちが虐殺され、捕捉された。多くの優秀な同志を失った。全左翼勢力は、諸々の理由からこれを支持し、称賛した。我々にとって、非常に教訓多い期間となった。コトの成り行きを見守っていた彼らが、たとえ反帝国主義者であり、反ファシストであったとしても、この裏切り行為に際し、彼らは我々に助けの手を差し伸べるどころか、敵対する立場に立ったのだ。恥知らずな活動家たち…。

だが我々は革命勢力である。我々はこの国で革命を達成するために、今、ここに存在している。革命の利害によって我々の行動、日常、偏狭さなどが定義されるのだ。これは現在も貫かれている。

反ゲリラ路線一派は、今や一掃された。現在、彼らは脱落裏切り一派として苦汁をなめている。我々が語ってきたことが、まさに正しく証明されたのだ。我々はこれを仲間たちに伝えるべく試みてきたが、理解しようとしないうちに、ものごとを伝えるのは不可能である。今もって理解されていない事柄が多く存在している。我々を消滅させることなどではしないのだ。消し去ろうと夢見るのは、デブ・ソルの闘いの歴史を知らない者だけである。

我々に見られる「運動的衰退」とはどのようなものであるのか。現在あるのは、衰退などではなく、拡大であるのは明らかである。これこそまさに我々の力のデモンストレーションであろう。

1992年にいたるまで、我々はいくつかの勝利をおさめてきたが、大都市部においては組織されておらず、地方を基盤に活動していた。今日、わが武装勢力、ならびに非武装勢力をもって、我々はあらゆる形態での活動の展望を提起しうることができる。これは強固な根を大地に食い込ませつつ、大都市部からアナトリア、そして地方都市を通した活動である。大地に伸びた我々の根は、深く深く食い込んでいる。これを引き抜くことなど誰にもできない。この段階を目の当たりにしながら、これを衰退だなどとは言えないだろう。

【Q】ソ連の崩壊を、来る革命と社会主義の視点から、どのように解釈されますか。理論的な点は別にして、実践的、実際的な部分で、ソ連崩壊前と後では社会主義思想への相違がでたのでしょうか。もしあるとすれば、お聞かせください。

【A】ソ連、その他の社会主義ブロックの崩壊は、世界の革命運動にとって大きな損失であった。ソ連が帝国主義勢力に対して築いたバランスシートは、たとえそれが改良主義的なものであって誤った政策に基づいていたとしても、多くの革命運動、民族解放運動に「活躍の場」をもたらした。このバランスシートにすべての希望を委ねていた運動は、この崩壊以後、降伏、屈服の局面へと向かった。世界革命運動は、一時的にその力を失った。帝国主義は世界を支配下におき、残る社会主義諸国に対して支配を強化すべく、各地で闘われていた独立戦争や解放闘争への攻撃を開始した。だがこれらはすべて一時的なものとなろう。帝国主義が自ら構造的諸問題を解決するのは絶対的に不可能である。諸矛盾は日増しに深刻化しており、(帝国主義国家は)もはやガタガタの状態なのであり、自らがその矛盾を解決することなどではしないのだ。今日、民族的、社会的独立戦争が、大いなる自信のうちに拡大している。崩壊した社会主義諸国に暮らしていた人民が見たものは、資本主義の残忍な顔である。社会主義に誤りや否定的な側面が存在したにもかかわらず、人民は再び社会主義の道への移行を望んでいる。当時目にしたセンセーショナルな「映像」は、何を証明するものでもなかった。よりよき状況を目指す真面の歩調は、速度を変えつつも前へと進んでいる。

ソ連崩壊の前後でも、我々の視点は揺らいではない。『ゴルバチョフの風』が、民衆を魅了した時でさえ、我々は大いなる自信を持って真実を叫んだ。我々の過去への認識は、今日、歴史的な重要性を有している。当時我々が目にし、書き記したことが、現在起きているのだ。我々の社会主義の解釈で、唯一変わったことと言えば、我々が予期していた以上に、社会主義から共産主義への移行には長い期間を要するのだ、ということであった。

【Q】1991年以降の運動的衰退は、「敗北」と解釈していますか。社会主義の崩壊による影響はあるのでしょうか。この過程に、社会主義が何らかの役割を果たしていたなら、これはイデオロギー面における敗北ということにはならないでしょうか。この状況を前に、トルコ左翼はどうすべきなのでしょう。

【A】何度も繰り返し言っていることだが、我々はこの1992年以後の状況が「衰退」だなどとは信じていない。こういった「敗北」という悲観的見方や議論がどこからもたらされたのか、不思議に思う。全くもって理解に苦しむ。

我々は革命的政治運動と大衆運動の発展を説明しようと努力してきた。もちろん社会主義の崩壊は、大衆闘争への発展の速度に若干の影響を与えてはいる。だがこれは特筆されるべきほどの要素ではない。今日、社会主義の崩壊という用語を用いて、多くがこれを語ってはいる



が、これらの類いの説明は全くもって無意味である。マルクス・レーニン主義者は、外的勢力に頼りはしない。まさにこの理由をもってこそ、誰もが社会主義の崩壊に不満を出し始める真只中に、武装闘争に導かれる社会主義建設の旗を我々が高く掲げることができたのだ。勝利の日まで、社会主義の旗が倒れることはない、と我々は強く確信する。

こうした議論に時間を割くのは、まったくの無駄である。あらゆる生活分野での闘争組織、地方—都市を貫く統一的革命闘争の戦略に基づく行動、武装闘争と大衆運動の結合、合法—非合法共同闘争組織、これらなしには重要な発展は勝ち取ることはできないと確信する。これこそが、なぜ我々の闘争が躍進し、強化されているのかという事実への解答である。社会主義の崩壊を嘆く者は、まず真実を見なければならぬのだ。

今日、トルコは革命の入り口に差ししかかっていると言えよう。独裁側は、全てが麻痺している状態である。諸矛盾は一層深刻化の度合いを深め、また複雑化している。トルコは不安定、内乱、飢餓の国となった。都市や山々にゲリラの銃音が響かない日はない。独裁権力側にある全政党ならびにその協力関係にある政治党派は、現在の危機の解決を見いだすことに失敗している。これによってかわるのが軍事政権では、なんの解決にもならないばかりか、事態を一層悪化させる末路となるのは明白だ。諸矛盾には全く別の選択肢を創出することが必要である。重要なことはトルコ人民の声となり、人民の闘争を領導することである。そう、これこそ我々がまさに今日なさんとしていることである。そしてこれを実際に実現できる者こそ、生き残るチャンスがあるのだ。諸矛盾に終止符を打つことができる唯一の権力とは、革命勢力による権力であり、人民が全面的な信頼をおくことのできる変革の運動は、他にはないのだ。

【Q】今日、前進しているクルディスタン解放闘争は、トルコ左翼にとっての特別な課題となっていると思いますが、1984年以降、クルド問題はトルコ左翼にいかなる課題を要請し、どのような取り組みがなされてきたのでしょうか。

【A】1984年以降のクルド民族解放闘争への、トルコ左

翼の全般的な対応は明らかである。PKKの武装闘争がエスカレートしてからというもの、独裁支配の抑圧と国粋主義運動にさらされるクルド人を置き去りにする形で、トルコ左翼は抑圧と暴力の現場クルディスタンから逃亡してきた。「クルド解放闘争は我々の管轄外」などと認識したことはない。我々の戦いが、この大地に暮らす諸民族の闘いであると同様、我々はクルド独立戦争の主要な要素であり、領導者である。この地平で我々は同じゴールを目指して闘う他の革命勢力、反ファシズム運動、愛国的諸組織を受け入れる。たとえ彼らが不完全であり、誤った政策を持っていたとしても…。我々のアプローチは、クルド民族解放勢力と同じスタンスをとっているが、クルド民族解放勢力は、真の解放を目指してはいない。彼らの地平は、まさしく民族主義に限定されたものである。しかしながら彼らの闘争は、前進的であり、明確に革命を目指すものである。我々があらゆる他の左翼に反対はしないごとく、彼らとは連帯し、友好を結ぶ用意がある。

今日、クルド人民は、解放闘争は決して1人でできる闘いではない、と理解していることと思う。これは他の民族との連帯、そして独裁支配権力の解体を通じて、唯一なされるものなのである。彼ら諸組織が、我々に友好的である理由はここにある。ここにこそ未来において新たな発展をもたらさうな真実があるのだ。

PKKには多くの支持者がいる。そして醸造された大衆の自然発生性は、つねにPKKを支持できる状態にある。だがPKKは、大衆を組織してはこなかった。彼らが武装闘争に重きをおいていたが故であり、都市において人民を組織する感覚や能力は欠如していた。これは彼らがブルジョア民族主義者が「民主的変革」レベルの諸活動を行なっている状態を認知していたためである。大衆との接触における誤り、そして最終的に民族主義戦略として実行される政治路線と戦術は、その進行を妨害するものとなり、大衆を遠ざけてしまうものとなるであろう。我々は常にこのことを語ってきた。再び同じことを言わねばならない。もちろん彼らが現在たどりついた、その成功と展望をないがしろにすべきではない。現在、PKKがこの問題の解決策としてとろうとしている手法に、我々は疑問を投げつけなければならない。これは独

裁側に「和解の道」という「希望」を与えるばかりか、国際帝国主義が問題解決の糸口として期待をよせるものでもあるのだ。民主的諸権利を獲得するために、武装闘争を遂行している目的そのものを変えてしまうものである。こういった政策、戦術では問題を解決しえはしないのだということは、クルド人民はその経験からよく知っているはずだ。バルザーニとタラバーニ（訳註②）の経験に学んでいるはずではなかったのか。もし帝国主義の下僕となるクルド国家が樹立されるならば、クルド人民にもたらされるのは飢えと悲惨以外にはない。これは現在、イラク北部でおきている状況そのものである。なによりもまずPKKはその戦略を変えねばならない。PKKが戦略を変えない限りは、未来の展望に基づく現在の闘争の意義は無に帰する。バルザーニは長年にわたる闘争にもかかわらず、この視点にだけは陥らなかった。バルザーニに比べて、PKKの闘争は非常に若い。PKKが、バルザーニと同じ視点にわずかな期間で到達してしまったことは議論されねばならない点である。

先にあげたPKKのジレンマを受けて、独裁権力側はクルド問題への戦略を立てた。当初から独裁側は、運動をクルディスタン内に封じ込めることで、闘争を解体する算段であった。その戦略に基づき、権力側が「取り引き」の場へと引きずり出したのは明らかである。独裁権力側は、例えば文化的諸権利を認めたり、地方自治権を一定程度認めることで、武装勢力を山々から引きずり降ろそうとしている。これが、どちらも武装闘争を抹殺するためのものであるのは明らかだ。独裁権力が、これを実現しえるかどうかの議論は、また別問題だ。先にも述べたが、PKKのこの誤った戦略は、独裁側を強化する結果を生んでいる。PKKが優勢である部分は存在するかもしれないが、これは決して未来をもたらすものではないのだ。こういった理由から、独裁権力側は何の恐れもなく邪悪に満ちた攻撃を加えつづけている。

独裁権力側がもっとも恐れるのは、地方、都市部において武装闘争をおしすすめるクルド人、トルコ人やトルコ内の諸民族による組織が直接的に権力奪取を目指す形態をとることである。この戦略に従い、我々は武装闘争を推進させている。これは独裁権力のイニシアチブを奪取し、クルド人民をそのジレンマから解放するものとなるだろう。我々はこれを、まさに前進させつつあるのだ。強大な力と影響力をもったクルド解放闘争という任務を遂行しているのだ。この戦略による我々の闘争は、クルディスタンの都市部、ならびに山岳部において力を獲得しつつある。

クルド民族解放運動と強固な関係を構築することを、我々は望んでいる。クルド民族解放運動は、実際には脆弱であるのだが、強固に映っている。その実際の脆弱さは、イデオロギー的弱さである。民族主義プラグマチズムによってもたらされた脅迫観念である。こういった理由から、我々の協力と友好の関係からは一定の距離がある。（PKKは）不自然な手段で、そして力とテロルで唯一的にクルディスタンにおいてのみ権力を握らんとしているのだ。イデオロギー闘争、党派批判の名のもとに、





不当な手段を使い、ウソとゴマカシで支持者を欺いている。

我々をクルディスタンから分断できる者などいないのだということを、PKKと左翼勢力は知るべきである。クルド人民の闘争へのわが党的な任務遂行を妨害できる者などいないのだ。これらの行動は、その口先だけの実行者にこそ、跳ね返ってくる。自身のイデオロギーを信ずるものは、協力、友好、共闘を恐れはしない。遅かれ早かれ、我々の正当性は理解されることとなろう。組織された力（PKKのこと／訳注）には理解できなくとも、クルド人民には理解できるであろう。PKKは我々と手を握るべきである。ともに手を取りあいトルコとトルコ人民を解放しようではないか。現在までの段階では、クルド民族主義勢力は、我々と共闘の意志があるように見せかけているが、これは全くのウソである。PKKから共闘の申し入れはなかった。そして我々の申し入れには、横柄な態度で受け答えをしている。PKKは我々の勢力の拡大を制限しようとしたのだ。PKKは闘う仲間との統一を構築することはせず、そのヘゲモニーを発動させつつ、弱小党派や有効性のない組織と政党を形成することを選択した。そしてこの活動を通じて人民大衆を誤った方向へと導いた。しかし彼らの行動は何にも到達

しえず、みずからの信頼を傷つけるものであった。

【Q】トルコ左翼に対して、他に何か述べることは。

【A】最後に我々は、今日のトルコで歴史的に重要に任務を負っている全左翼勢力、愛国勢力、革命派、民主勢力に対し、言っておかねばならない。我が人民、トルコ人、クルド人、その他の諸民族は歴史の流れにおいて決して多くの人々には与えられなかった名誉ある任務を今、担っている。だれにもこの任務の遂行を妨害する権利などない。我々は、この任務を完遂するため、人民を領導せねばならない。これを完遂しなければならない。そしてこの目的のため、我々の力を結集させよう。これが無理だとしても、共同闘争の枠組み作りから始めよう。我々の団結は、トルコ民衆、クルド人、トルコ人、その他民衆の団結となろう。我々の団結は、必ずや勝利をもたらすであろう。戦いの準備のできている者とは、いつでも誰とでも協力する用意が我々にはある。トルコにおける戦争は、我々の目の前に在るのだ。拒否できない力であるのだ。武装し、戦いを激化させ革命を現出させよ！これこそトルコの人民、労働者が我々に期待していることなのだ。これこそトルコが必要としていることなのだ。これこそが世界革命にとって必要とされているのだ。

《訳註① 9・13事件》

1992年9月13日、幹部ベドリ・ヤガンが、デブ・ソル指導者ドゥルスン・カラタシを45日間にわたり幽閉。自らが党内ヘゲモニーを獲得したことを宣言。ヨーロッパ各国のデブ・ソル支部が舞台となったことから、ヨーロッパで内ゲバ抗争に発展。のちにトルコ本土にも飛火し、双方に死者、負傷者を出した。

《訳註② バルザーニとタラバーニ》

バルザーニはクルディスタン民主党（イラクKDP）、タラバーニはクルディスタン愛国同盟（PUK）の指導者。湾岸戦争後、アメリカ主導の国連の下、イラク北部にクルディスタン自治区を樹立したが、主導権を巡って度々抗争を繰り返している。どちらもトルコとは友好的関係を保っている。周辺国家や帝国主義国家の利害関係によって路線が左右される例として言及されている。

世界革命運動情報



★連絡先 〒606 京都市左京郵便局私書箱57号

ARP

★TEL・FAX 075-781-1253

★E-mail: arpic@mbx.kyoto-inet.or.jp

★定期購読料 10号分 3500円

★郵便振替口座

00920-0-252923 ARP